

アウト・オブ・コントロール

木口まこと

アウト・オブ・コントロール

木口まこと

「……が切断されました。自律走行に……」声がした。

ひろ子をあわててフロントガラスの先に目を向けた。考えこんでいて、周りの状況に全く注意を払っていなかった。まぶしいほど真つ青な空の下で、前を行くのはさつきまでと変わらず、空より少し暗い色のヒョンデだ。ダツシュボードに目をやる。車間表示によれば、ヒョンデとの距離は五メートルに保たれている。設定どおりだ。

「聞き逃したわ。なにがどうしたって？」と訊きかえす。

「グローバル・コントロールが切断されました。自律走行に切り替えました」ダツシュボードから再び声が言った。「車間距離を開けます」

ひろ子は思わず小さく舌打ちした。まだ高速に乗ってから十分も走っていないはずだ。

「急いでる時にかぎって故障？　すぐに直す？」

改めてステアリングの手前側に両手を置き、背を伸ばしてシートに真っ直ぐに座り直す。

目を上げて、フロントグラスの上に取り付けられた小さなスクリーンでバックカメラの映像を確認する。さっき見たのと同じ小型トラックが映し出されていた。白のマツダだ。やはり五メートル離れているのが表示で確認できる。グローバル・コントロールの制御下なら設定どおりだけど、自律走行となると、この近さはうれしくない。

高速道路で自律走行を経験するのは初めてだった。もちろん、自分で操作する必要は万にひとつも起きないだろう。落ち着いてAIにまかせておけばいい。それくらいは頭ではわかっていても、ステアリングにかけた手が汗ばむのを感じた。

これからの手順なら頭に入っている。車は後続車に減速信号を送りながら、前の車との距離を少しずつ離していこう。自律走行での安全距離まで離れさえすればあとは問題ない。減速信号を受けて、後続の車も距離を取ってくれるはずだ。車の列の中に一台くらい故障車が混じっていても、そこはGCがなんとかでもする。そうは言っても、自分の車がその一台になるとは今の今まで考えたこともなかった。

「セルフチェック・ルーティンを走らせましたが、故障ではありません。コントロール信号が失われました」意外な言葉が返ってきた。「先行車からも減速信号が出ています」

「失われたって、どういうこと？ 回線はひとつきりじゃないでしょう」ヒョンデから目を離さずに訊いた。

「全回線が途絶えています。グローバル・コントロールの信号は全く見つかりません」 AIが感情のない声で答えた。

「意味がわからない。何が起きてるのか教えて」

「グローバル・コントロールが途絶えています。それ以上は今のところわかりません」

強固なバックアップ体制が整っているはずのGCが完全に失われているというのはわかには信じられなかった。それが本当だとしたら、状況はとんでもなく厄介だ。過去にそんな事態があったかどうか、ひろ子はすぐには思い出せなかった。だが、前の車が減速信号を出しているからには、どうやら本当にその厄介な事態になっているのだろう。

それでもこの時ひろ子はGCがすぐに復旧するに違いないと考えていた。

「コントロール・センターからは？」ひろ子が言った。

「これまでのところ連絡はありません。引き続き、連絡を待ちます」

「まったく、こんな時に」

そうつぶやいた時、前を走っていたヒョンデのブレーキランプが赤く点った。ヒョンデの姿が迫ってくる。ひろ子は息を飲んだ。

タイヤが軋む音が車内に響き、軽い衝撃とともに、シートベルトが肩に食い込むのを感じた。それから加速度が消え、静寂が訪れた。

「衝突を避けるために急停止しました」相変わらず感情のない声でAIが言った。

表示を見るまでもなく、ヒョンデまでは一メートルほどしかない。バックカメラに目をやると、マツダも同じくらい近い距離で停止している。ひろ子は大きく息を吐

き出して、首を横に振った。まず衝突しないはずと思っただけでも、速くなった鼓動はすぐにはおさまらない。

右に目をやると、低速レーンを走る車がひろ子の車をゆつくりと追い越していくのが見えた。

「低速レーンに移れる？」と口に出してみたが、GCの力を借りずに車線変更できないことはひろ子にも分かっていた。

その間にも低速レーンの車が減速していく。すぐに車の流れは完全に止まってしまった。

「どうして？」思わずハンドルを叩いた。

一刻も早く東京に帰りたかった。それなのにどうしてこんなところで渋滞に巻き込まれているのだろう。GCさえ正常に来ていけば、渋滞なんか起きるはずはな



かった。いったいGCシステムに何が起きたというのだろうか。理由がなんであれ、復旧を待つしかないのはわかっていた。

「ニュースが入りました。切り替えます」

AIの声が消え、別の声が聞こえてきた。「……東名高速道路で大規模な渋滞が発生しているようです。詳しいことは、情報が入りしだいお知らせ……」

「東名って」思わず、大きな声が出た。「どういうこと？」

二時間前。

ひろ子は近所のカフェのテラスで遅めの昼食をとり、マンションの部屋に戻ったところだった。汗ばんだデニムの半袖シャツを脱いで洗濯機に放り込み、ハンドバッグだけを持ってリビングに入る。

「ニュースを見せて」AIに声を掛けると、テレビがついた。

「……次はアメリカ大統領訪日のニュースです。政府は警備体制を強化するた  
め……」アナウンサーの声が流れてきた。

その時、ジーンズのポケットで電話が鳴った。この着信音は由理だ。AIにテレビの音量を下げさせ、ポケットから電話を取り出す。受信ボタンをタップして、耳に当てた。

「わたしだけど。なに？」ハンドバッグをソファに投げ出しながら、電話に向かつて声をかけた。タンクトップから出た腕にエアコンの冷気が心地よかった。

だが、返事がない。

「帰るのは明日だよ。これから部屋を片付けて、夜は送別会をしてくれるんだって」そう言って、再び耳をすます。

やはり返事はなかった。電話の向こうからかすかな物音が聞こえてくる。胸騒ぎがした。

「由理？なにかあったの？」ひろ子はもう一度問いかけた。

「……た」ようやく、絞り出すようなかすかな声が聞こえてきた。

「なに？ 聞こえないよ」

電話の向こうで再び沈黙が訪れた。エアコンの音がやけに大きく聞こえる気がした。部屋に戻ってからずっと立っていたことに気づいて、ソファの端に腰をおろす。

「どうしたの？」意識してゆっくりと尋ね、返事を待った。

「……しが」由理が小さく呟いた。それからひと呼吸置いて、今度ははつきりと言った。「たかしが」

「たかしって、あの隆史？ 何かあった？」

「相談があるって……電話がきて……十時頃に来たの……」小さな声が続ける。

「部屋に？」

「部屋に。隆史だから、安心して……」再び沈黙。

ひろ子は何も言わずに次の言葉を待った。

「彼女とぎくしゃくしてるからって……はじめはそんな話……プレゼントはなにがい  
いかとか……だから、話を聞いてて……そしたら突然……」そして、また沈黙。

「わかった、それ以上言わないでいいよ」ひろ子が遮った。「こわかったね。けが  
はない？」と尋ねる。

「ちよつとぶつただけ……だと思う……」また声が消えていく。

テレビの上の壁にかかった時計に目をやる。二時を少し回ったところだった。

「今までどうしてたの？」つとめておだやかに訊いた。

「ぼんやりしてて……たぶん二時間くらい。それから、シャワーを浴びて……それで、この電話」

「そうか」それだけ口にして、言葉を探した。「警察には？」思い切つて尋ねた。

「行ってない……」小さな声が答える。「行きたくない……行ってもしかたない……あのね……」また由理の言葉が途切れた。

「待ってて」ひろ子が言った。「今からすぐに帰る」

部屋を見回して、計算してみる。荷物はあとで取りにすればいい。

「四時間くらいで着くと思う」ひと呼吸置いた。「いい？絶対に変なことはしないでね。由理は薬を飲んで寝てしまうといいよ。わたしが行くまで眠って」

小さくうなづく声が聞こえた。

「すぐに行くから」

由理がもう一度小さくうなずくのを聞いて、「今からしたくして出るよ。またあとでね」と声をかけてから電話を切った。

寝室に入つて、クロゼットを開ける。小さなボストンバッグを取り出して、すぐに必要になりそうなものだけを急いで詰め込んだ。真つ先に目に止まった赤い半袖シャツを取り、腕を通して、前のボタンを留めた。リビングに戻つてソファからハンドバッグを拾い上げ、玄関に出た。サンダルに目をやったが、思い直して赤いスニーカーを履いた。紐を締めるのももどかしく感じられた。

玄関を出て、後ろ手にドアを閉める。オートロックがかかる音がした。エレベーターホールまで走つて下りのボタンを押し、いらいらしながらエレベーターを待った。

地下の駐車場に着くと、薄緑のホンダに駆け寄った。運転席側のドアの取っ手に右手の人差し指で触れ、ロックが解除される音を確認してドアを開ける。ヘッドライトが点つた。

「東京に帰る。郡山インターチェンジから東北自動車道に乗って」ボストンバッグを後部座席に放り込み、運転席に潜り込んで、シートベルトを留めながらそう告げた。かすかなモーター音とともに車が動きだした。

十五分ほど経つても、目の前のヒョンデはいつこうに動き出す気配を見せない。右の低速レーンにはさつきと同じ車がいる。最初の驚きがおさまると、いらだちが募ってきた。

「警察からデータが入りました」AIの声が沈黙を破った。「グローバル・コントロールが広範囲に途絶えて、渋滞が発生しているという内容ですが、渋滞状況の詳細は調査中です」

東北と東名で同時に渋滞が発生しているという状況はまったく理解できなかつた。そんなことが偶然起きるとは考えられない。同じ原因でGCシステムに障害が発生したとすると、考えられる原因はなんだろうか。ひろ子は一刻も早く復旧の見通しを知りたかった。

「インターネットには渋滞が発生している映像が大量に流れています」

「見なくていいよ。新しいことが分かったら教えて」

ひろ子はシートにもたれて目を閉じた。



二分ほどそうしていただろうか、またAIの声が出た。「警察からの新しいデータです。すべての高速道路のグローバル・コントロールが停止しています。渋滞は全国で発生中です」

「すべて？」ひろ子は驚いて目を開けた。「なにそれ。ニュースはどうなってる？」

「ニュースも来ました。切り替えます」

「高速道路の続報をお伝えします」声が車内に流れ出した。「発表によると、十五時半現在、全国の高速道路でグローバル・コントロール信号が途絶えている模様です。そのため、各地で渋滞が発生しています。原因はまだ明らかになっていないとのことです」

「ああもう」シートにもたれたまま、小さくつぶやいた。「いったい何がどうなってるの？」

「高速道路上の車にお乗りのみなさんは落ち着いて続報をお待ちください。新たな情報に分かりしだいお伝えします」ニュースはそれで終わりだった。

「繰り返しますか？」A Iが訊いた。

「いいよ。何もわからないってことはわかった。次の情報を待とう」ひろ子は答えた。

なにかとんでもないことが起きているらしかった。これが何を意味しているのか、ひろ子には見当もつかなかった。ただ、どうやらすぐにも復旧すると期待するわけにはいかなかったようだ。

「由理にメールを送って。本文。高速で渋滞に巻き込まれてしまったので、到着が遅くなるかもしれません。待ってて。本文終わり」

由理は寝ているはずだから、このメールをいつ読むかは分からない。彼女がメールを読むより先に自分が着ければいいのだけど、そのためにはとにかく車が動き出さないことには話にならない。当面できることはなさそうだった。

ひろ子は頭の後ろで両手を組んで、ふたたび目を閉じた。

マンションを出てインターチェンジに向かう途中で、由理に電話をかけた。

「ひろ子？」呼び出し音が五回なったところで、ぼんやりした声が答えた。

「わたし」ひろ子が言った。「寝ようとしてたのに、ごめんね。今出たところ。これから高速に乗るから。待ってて」

「薬を飲んだから、ベッドに行くところ。着いたら起こして。気をつけてね」

「ありがとう。またあとでね。おやすみ。あいしてる」

由理がうなづく気配を感じてから、電話を切った。

「高橋チーフにメールして」AIに声をかける。「本文。急用ができたので、これから東京に戻ります。送別会に出られなくなりました。すみません。宿舎の荷物は後日引き取りに戻ります。詳しいことはあとでまた連絡します。本文終わり」

今日まで三か月続いた出張作業で郡山チームのメンバーともそれなりに親しくなっていたので、こういう形であわただしくあとにするのはいささか申し訳ない思いがあった。それでも、今はなにを置いても由理のところに行かなくてはならない。借りはいつか返せばいい。今の仕事を続けていれば、その機会はあるだろう。

「隆史のやつ」ひろ子はつぶやいた。「仲間だと思っていたのに」

隆史に電話してやろうかという考えが頭をよぎったが、思いとどまった。

何度か信号につかまり、やがて車は市街地を抜けた。そのまましばらく走ると、郡山インターチェンジへの進入路の表示が見えてきた。

「東北自動車道に乗ります」AIの声がした。「グローバル・コントロールによる制御に切り替わります」

「警察のクワッドからの映像が来ました」AIが沈黙を破った。

「映して」ひろ子は目を開いた。

フロントウインドウが暗くなってヒョンドの姿が見えなくなり、入れ替わりに高速道路を上空からとらえた映像が現れた。ひろ子は身を乗り出す。カメラは道路に沿って進んでいく。

「これはどこ？」ひろ子が訊いた。

「東名高速道路の二百十キロポイントを過ぎた地点です。クワッドは名古屋方面に向かつて飛んでいます」

道路に並ぶ色とりどりの車の屋根が見える。上下線とも高速レーンと低速レーンの両方で渋滞が起きていた。上下線を比べてみると、車が完全に停止しているのは明らかだった。見えている範囲に動いている車はなさそうだ。

「待つて」視野の中で車の列がわずかに乱れているのに気づいた。「あれは何？止めて、下のほうを見せて」

クワッドからの映像が止まった。

「ゆっくり戻して」

映像が逆に進み始める。

「止めて。右下をズームアップして」映像の一部が拡大されていく。「もう少し右。そう、そこ」

車の列が乱れている理由がわかった。上り線の高速レーンで一台の小型車が前のトラックに衝突している。小型車は少し車体を斜めにして停まっていた。車の横に四人の人間が立っているらしいのもわかる。

「そうよね。一斉に自律走行を始めたら、衝突事故だって起きるよね」  
大きな事故ではなさそうだったので、ひろ子は安堵の息を漏らした。

「これは大変だな」とつぶやく。

「東北道の映像も来ました」再び声がした。

「切り替えて」

ひろ子が口にするよりも早く、フロントウインドウの画面は別の道路の映像に変わっていた。やはり、上下線とも長い車の列が続いている。

「これはどのあたり？」ひろ子は訊いた。

「このクワッドは那須の近くを北に向かっています」AIが答える。

そのまましばらくクワッドからの映像を眺め続けた。何か所かで衝突している車が見えた気がしたが、もうあえて映像を止めさせはしなかった。たぶん自律走行で大事故は起きないだろう。

やがて下り車線の車の列が途切れた。なんだろうと思つてそのまま見ていると、少し先にインターチェンジへの誘導路があつた。その手前に車が並んでいる。どうやら、事故車よりも前にいた車はインターチェンジから一般道に下されているらしい。よく見ると、誘導に当たっている警察官の姿もあつた。



クワッドがインターチェンジの上空を通り過ぎると、再び渋滞の列が始まった。

もしこれが各インターチェンジで行われているのだとすれば、ひろ子の車が今動けないでいるのは、次のインターチェンジとのあいだに何台か事故車がいるからなのだろう。それでも、二車線を使ってうまく誘導すれば、いずれは事故車を除くすべての車を一般道に下ろせるはずだ。もともと、次のインターチェンジで作業が既に始まっているかどうかはまだ分からない。実際に自分が下りられるまでにどれくらいかかるか、予想もつかなかった。

「ここから五キロほど南に別のクワッドがいます」AIが言った。「そちらからの映像に切り替えます。クワッドはこちらに向かってきています」

もう一度映像が切り替わった。ここでもやはり上下線とも車の列が続いている。

ひろ子は目をこらして車の列を見つめる。いた、事故車だ。いったい何か所で衝突事故が起きているのだろう。

「順番が回ってくるまでは、動けないってことね」ひろ子はつぶやいた。

「由理にメールして」A Iに告げる。「本文。渋滞がとんでもないことになってる。すごく遅くなるかもしれないけど、必ず行くから。もし目が覚めたら連絡して。本文  
終わり」

そのまま車の列を眺めていると、明らかに今までとは違う乱れかたをしている場所を見つけた。何かが起きている。

「止めて」ひろ子が言った。「少し戻して。そこで止めて。真ん中をズームして」

映像が拡大された。青いボディの大型トラックが横向きになって、ふたつの車線をふさいでいるのが見えた。低速レーンを走っていたはずだが、急ブレーキをかけたときに後輪が滑って高速レーンに飛び出したのだろう。トラックは両方の車線でほかの車と衝突していた。

「大きな事故も起きるときは起きるってことね」ひろ子はため息をついた。

「ねえ、今映ってる場所はインターチェンジのどっち側？」

「この車と次のインターチェンジとの間です」AIが淡々と答えた。「警察からのデータによると、ここからインターチェンジまでの間に衝突車が四台います」

「つまり、二車線をうまく使えばインターチェンジから下りられるという希望はなくなつたわけね。あのトラックをどけなきゃにつちもさつちもいかない」

ひろ子はまたシートにもたれかかった。

「いったいいつこの高速を出られるの？　いったいいつ東京に着くの？　いったいいつ由理に会えるの？」

AIからの返事はなかった。

二時間近く経ったはずだが、状況は何も変わっていないなかった。もちろん、コントロール・センターや警察は対応に追われているに違いない。だが、少なくともひろ子の車の周りではなんの動きも見られない。ときおり警察からの連絡が入るが、そのまま待てというばかりだ。クワッドからの映像を見るのはとつくにやめていた。

日が傾きかけている。

ひろ子は腕を上には伸ばして、両方の手のひらで天井に触れた。由理からは返事が来ない。眠っているのなら、そのほうがいい。

その時、ヒョンデの助手席側のドアが開いて、男が降りてきた。三十台半ばくらいか。白いTシャツと黒のジーンズを身につけている。左の腕にタトゥーが見える。男が振り返ると腰をかがめて車内を覗き込み、何か言っている。すぐに、男に手を引かれて、やはり黒いジーンズの女が降りた。Tシャツは男と対照的に真っ赤だった。男と同年代に見える。

男は二度ほど膝の屈伸をしてから、手を上にあげて大きく伸びをした。女が何か話しかけている。

ひろ子も外に出てみることにした。どのみち、当面は動き出しそうにない。シートベルトをはずして、上体から助手席に移動し、足を引き寄せる。ドアを開いて、左足を外に踏み出した。

路肩では心地よい風が吹いていた。座りつばなしだったせいで脚がこわばっていた。左足で立って、右膝をゆっくり三度曲げ伸ばしする。次に反対の足。それから、腰に両手を当てて少し背をそらし、空を見上げた。

男がひろ子を見て、軽く会釈した。ひろ子も会釈し返す。

「大変ですよね」と女が声をかけてきた。

「困りますよね」ひろ子は女に聞こえるくらいの声で答えた。「早く東京に着きたいんですけど」

「前の事故車をどけないと無理みたいですね」今度は男が口を開いた。

「早くなんとかしなければいんですけど」と返事をする。

そうか、これは災害なんだなとひろ子は気づいた。たまたまここで出会った見知らぬカップルとのあいだにちよつとした連帯感が生まれる。だけど、それも今だけだ。

遅かれ早かれこの状況は解消し、わたしたちは互いの名前も連絡先も知らないまま別れていく。そして、二度と会うことはない。例えば、事故で電車が止まった時に駅の中で生まれる連帯感のようなものだ。

「あ、あれ」と男が空を指さした。

ひろ子は振り向いて、北の空を見上げる。目を凝らすと、遠くに白い物体がいくつ浮かんでいるのが見えた。近づいてきているようだ。

「あれは？」とひろ子が訊いた。

「たぶん」と男が答える。「大型のクワッドですね」

ひろ子がかがんで助手席に上体を入れた。

「警察からの連絡はどうなってる？」

「事故車を取り除く作業が始まっています」AIが答えた。

ようやく事態が変わろうとしていた。ひろ子は助手席に乗り込んでドアを閉じ、からだをずらせて運転席に移った。フロントガラスの向こうではヒョンドエのふたりも車に乗るところだった。

助手席の足もとに置いたハンドバッグを取って、中をあさると、三日ほど前に買ったチョコレートバーを見つけた。包みを半分開けて、融けかけているチョコレート・バーをかじった。少し苦みを含んだ味が口の中に広がる。

すっかり食べてしまってから、シートベルトを留めて、前を向いた。

結局、動き始めるまでにはさらに二時間ほどかかった。四機の大型クワッドがトラックを引き上げて高速道路から運び出すところはニュース映像で見た。ほかの事



故車は運び出されず、待ちくたびれた車の列は、二車線を交互に使って一台また一台とインターチェンジへ誘導されていった。

ようやくひろ子の番が回ってきた。ゆつくりとインターチェンジに向かう。同じようなことが日本中で行われているのだろうか。ひろ子は考えた。

インターチェンジをぐるつと回って下の道路に出る。高速道路が閉鎖されているせいなのだろう、一般道もひどく渋滞していた。

このまま一般道を通って東京に向かうのはどう考えても無茶な話だった。

「いちばん近い新幹線の駅は？」ひろ子が訊いた。

「新白河ですが、渋滞しているので二時間ほどかかりそうです」AIが答えた。

ひろ子は大きくため息をついた。今日はため息をつき通しだ。

「いいわ。新白河に向かって」

既に日は落ちていた。

ようやくマンションの玄関にたどり着いたときには日が変わっていた。息を切らせながら、ドアの横のパネルで604と入力する。パネルに赤いLEDが点る。カメラの前に手のひらをかざすと、小さな音を立ててドアが開いた。

エレベーターまで走り、上りのボタンを押した。ボタンの上についている階数表示の数字がひとつずつ小さくなるのをじっと見つめた。ようやくエレベーターが着いた。急いで乗りこむと、6を押し、扉を閉めるボタンを押す。エレベーターはひどくゆつくりと上がりはじめた。

部屋の前まで足早に歩き、ドアの横のボタンを押してから、再び手のひらをかざす。鍵が開くかすかな音が聞こえた。

玄関は真つ暗だった。足を踏み入れると、天井のライトが点った。かがんでスニーカーの紐をほどき、音を立てないように気をつけながら、廊下にかかる。

寝室のドアのレバーに手をかけて、静かに押し開ける。廊下の光が部屋に差し込んだ。そのかすかな光でベッドに寝ている由理の頭が見えた。ひろ子は息を詰めていたことに気付いて、大きく息を吐き出した。

ボストンバッグを床に置いて、ベッドの縁に腰をおろした。由理はゆつくりと呼吸している。ひろ子はその寝顔を見つめた。

一時間ほどもそうしていただろうか。由理が身じろぎした。

「由理？」ひろ子はそつと声をかけた。

由理がひろ子のほうを向いて、ゆつくりと目を開けた。

「ひろ子。帰ってたの」

「遅くなってごめんね」ひろ子が言った。

由理は黙ってひろ子を見つめている。ひろ子は左手を伸ばして、その頬に手のひらを当てた。

「飲むものを持ってきてあげるよ」

ひろ子は立ち上がり、ハンドバッグを持って暗いリビングに向かった。部屋に入ると、AIに声をかけて照明をつけた。テーブルに由理の電話が置きっぱなしになっていた。ハンドバッグをソファに投げ出して、冷蔵庫を開ける。冷えた紅茶のボトルを見つけ、コップに注ぐ。電話を取り上げてリビングを出た。

由理はベッドに起き上がって待っていた。暗がりには白いTシャツが浮かびあがっている。コップを渡すと、ゆっくりと飲んだ。ひろ子は再びベッドの縁に腰をおろした。

「はい、これ」コップを受け取ってサイドテーブルに置き、代わりに電話を手渡した。

由理が電話を操作するのを見つめる。

「ひろ子のメール、見てなかった。ごめんね」由理がひろ子を見た。

「いいよ、たいしたことは書いてないから」と答える。

電話に目を戻した由理が顔をこわばらせた。

「どうしたの？」見逃さずにひろ子が訊いた。

「隆史からメールが来てる」由理が小さな声で言った。

「貸して」

ひろ子は由理の手から電話をもぎ取った。画面に隆史の名前が表示されている。

タップすると、本文が現れた。

『ごめん』のひと言が目に飛び込んでくると、それ以上読まずに返信をタップした。『ばかにするな』とひと言だけ書いて、送信をタップする。隆史からのメールはそのまま消去した。

「受信拒否にしてしまおうよ。二度と会わなくていい」そう言っつて、電話をサイドテーブルに置く。

「そうする」由理はまた横になって、掛け布団を引っ張り上げた。

ひろ子はジーンズとシャツを脱ぎ捨てて、由理の横に潜り込んだ。

「抱いててあげるから、もうひと眠りするといいよ」そう言っつて、由理の頭の下に手を入れ、肩を抱きしめた。「わたしももうへとへと」

「ありがとう」由理が言っつた。

「家の電気を全部消して」と部屋のAIに声をかける。

真つ暗になった部屋のベッドでひろ子は由理の体温を感じた。

ジーンズの男女が薄汚れた雑居ビルを見上げている。女は四十代、男のほうは三十代。

「このビルの四階よ」赤木が大久保に言った。「ここを探し当ててるのに二週間かかったわ」

ふたりは狭い入り口からビルに入った。壁にテナントの一覧が掲げられている。赤木は四階の『大井町ネットワーキング』と書かれたプレートを無言で指差した。

階段脇のエレベーターの前で赤木が上りのボタンを押し、ジーンズのポケットに手を入れた。

「そんなに大変だったんですか」 ストライプのシャツの袖をまくりあげながら、大久保が尋ねた。

「匿名サーバーをいくつか経由されたら、追跡は不可能ね」

ふたりは降りてきたエレベーターに乗り込んだ。赤木が4を押すと、エレベーターはがたと音を立ててから上がりはじめた。

「じゃあ、どうやって？」

「愚直な総当たりよ」 赤木は肩をすくめた。「グローバル・コントロール・センターに入ってきたトラフィックと一致するパターンのトラフィックを探したの。暗号化されていても相互エントロピーを測ればある程度は分かるから」

「ああ、情報の人たちはエントロピーを測るのが好きですよね」

「それでも、総当たりだからね。馬鹿みたいなやり方しかできないの」



エレベーターが止まって扉が開いた。

「言っておくけど、何も残ってないわよ」赤木が言った。「二週間も経ってはね」と付け加える。

赤木が先に立って廊下の突き当たりまで歩き、ポケットから鍵を取り出して扉を開いた。中にはいる。

「これは」続いて部屋にはいった大久保が声を上げた。

部屋の中は壁も床も天井も全面が青い塗料で塗り潰されていた。

「徹底してるでしょ。もちろん何も残ってやしなかった」赤木が振り返る。「二週間ここでここにたどり着いただけでも褒めてほしいわ。これだって相当な幸運の賜物だし、うちのメンバーはみんな寝不足」

「コントロール・センターのセキュリティは固いんでしょう？」短い沈黙のあと、大久保が口を開いた。

「固いね。ものすごく固い。基幹インフラだから、破られたら困るでしょ。でもね」赤木が言葉を切る。「どれほど固くても、何かしらの穴はあるってこと。それは本当に細い穴だったけど、穴は穴よ。連中はそれを見つけ出した。しかも、すべてのコントロール・センターの穴を見つけた。システムは共通だからね」

「センターの関係者は誰も気づいてなかった？」

「わたしが知る限りでは誰も。センターにはセキュリティのプロが何人もいるのね。連中だけが発見したの。執念の勝利ってところ。わたしには無理だし、うちのメンバーのいちばん優秀な奴でも無理だと思う。たぶんあっちには天才がいるのよ」

大久保は部屋の奥に入り、壁をひとしきり眺め回してから、膝をついて床と壁の境目を調べはじめた。

「で？」背後から赤木が声をかけた。「あの犯行声明はほんものなの？」

「そうだなあ」振り返らずに大久保が答える。「僕の勘だと八対二でほんものかな。いや、根拠はないんですけどね。しかし、ほかに犯行声明は出てないし、テロ対策班が呼ばれたからには、上は相当信じてるんじゃないですか」

「怪我人は出たけど、死者はゼロでしょ。結局テロとしては失敗だったんじゃないの？」

大久保が振り返った。

「成功ですよ。その気になれば日本中の基幹インフラを人質に取れることを示したわけですから。連中も誰かが死ぬのを期待してはいなかったでしょう。自律走行車はめったなことでは死亡事故を起こさない」

「連中はすべてのコントローラー・センターを一斉に止めた。相当周到に準備しなくちゃ、こんなことはできない。でしょ？」赤木は大久保を見つめた。大久保がうなづく。「でも、この手は二度と使えない。次に同じ穴を狙おうとしても、もうそこに穴はないのよ。連中になんの成果が？」

「テロは成功なんですよ。事実、あれから二週間以上経ってもGCを復活させられずにいる。いや、GCを使う気になればいつだってできるんだけど、政府は再発を恐れているわけです」大久保は言葉を切った。「高速道路を全面的に自律走行にしたら、通れる車の数は激減します。実際、今はそうなってる。自律走行の高速道路で

の安全車間距離は四十メートルですよ。いつになったらそれを元に戻せるかは分からない」

「なるほどね」

大久保が立ち上がって、床にしていたほうの膝を手で払った。

「ありがとうございます。ここにいても収穫はなさそうですが、見られてよかったです」

大久保が先に立ち、部屋のドアを開けた。

「テロ組織の正体は五里霧中？」部屋に鍵をかけながら、赤木が訊いた。

「連中のセキュリティに穴があるとすれば、このビルの賃料の支払いでしょうね」大久保が答えた。

「どこかで必ずお金のやりとりが生じるわけね」

「一年分前払いされていますから、そのルート調べますよ。その件でまたお世話になると思います」

ふたりはエレベーターを降りて、ビルの外に出た。

「もう一度訊きたいんだけど」歩きながら赤木が言った。「犯行声明を信じるなら、目的はアメリカ大統領の訪日阻止でしょ？」

「そう書いてありましたね」

「だけど、このテロで外交日程は変えられなかったじゃない。訪日予定は変更なし。それでも、テロは成功なの？」

「外交日程は変わりませんよ」大久保が淡々とした口調で言った。「このテロで大統領訪日は阻止できません。連中もそんなことは百も承知でやってるんですよ」

その言葉を聞いて、赤木は立ち止まり、空を仰いだ。

